

西照

西照寺々報「さいしょう」

第9号

1989年7月25日

発行 浄土真宗本願寺派・西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

ご門主様おことば

大谷 光 真

ただいま祖巡教というかたちをとりまして、全国のお寺を巡回しております。この度ご縁ができてまして高岡教区へまいりました。

昨日からは、当地、皆様のお寺のあります新湊組へまいっております。昨日は組全体の集いを持っていただきまして、なごやかな中に意義の深いご法座の一日を過ごさせていただきました。今日は午前中に組内のお寺にお参りすることになっておりまして、そのご縁で皆様の西照寺にお参りさせていただきました。ご住職をはじめ、ご縁の深い皆様おそろいのご本堂で、阿弥陀如来様にお礼することができました。何よりうれしく喜んでおります。また、お寺の歴史を伺いますと、長い年月皆様の祖先の方々、先人の方々が厳しい生活の中にかかわらず、お念仏を大切にしてお寺を支えてきて下さったこと、災害にもあわれたようであります。そうしたことも乗り越えて今日に至っていらっしゃることに、誠にうれしく聞かせていただきました。

しかしまた、今日の世の中を顧みますと誠に難しい問題が沢山ございます。先人の方々のお心を正しく受け継いでいくこと、決して易しいとは申せません。特に日本の国は、めまぐるしく世の中が移り変わっていく。あふれるように豊かな、また、華やかな商品の数々が、目の前に出てまいりまして、私共は目を奪われ終には心を奪われて引きずられるように、あちらへこちらへと迷わされていく人生でございます。うっかりいたしますと、気が付いた時には、人生が空しく終わってしまうということにもなりかねません。それは、私一人の悲しみに止まらず、複雑な世の中の一つながりの中で多くの人々に影響を与え、世の中全体を難しくしていくことにもつながり

ます。真実の教えを聞かせていただき、恵まれた命の尊さを本当にかみしめて歩むということは、私一人の問題であると同時に、私の背負った世の中に対する責任でもあると痛感させられる今日でございます。

ところで、私達の宗祖親鸞聖人は、こうした私達の為に、阿弥陀如来のご本願念仏の教えをお聞き下さいました。それは、出家をして厳しい戒律を守り、学問を重ね修行を積んでさとりをひらく道ではなくて、私達のように家庭を持ち仕事を日々切実な願いを抱いている者が、阿弥陀如来様のまことのお心、真実のお慈悲の心であります南無阿弥陀仏をいただいて、この人生を力強く生き抜き、お浄土で阿弥陀様と同じさとりをひらかせていただく、そういう道でありました。

ですから、こちらで阿弥陀様に救っていただきたいとお願いをする必要もなく、また、善根を積み重ねるまでもなく、反対に阿弥陀様の方からすべてをととのえ救わずにはおかないと南無阿弥陀仏をもって呼び掛け、呼び続け救ってくださるのでございます。

なる程この世の事は、自分で解決をしていかねばならないのでありますけれども、もう一歩わが身を深く掘り下げてみますと、口で言うことは易しく実際に行うことは、誠に難しいことに気付かされます。人々の為を思い世の中の平和を願って行っておることも、気が付くと自分に都合のいいように事を運んでいることが少なくありません。阿弥陀様はこうした人間の姿をごらんになって、このままでは捨てておけない、救わずにはおかないと建てられたのが本願でありますから、それは決してこちらの都合のいい願いを聞いていただけ為ではなくて、反対に阿弥陀様の願いを私達が聞かせていただくことこそ大事なところでございます。

阿弥陀様のひろいお心を伺いますと、私達この世に生きているも

ひかり来たりて — 仏陀の出現 —

(9) 仏弟子の誕生

岡 西 法 英

釈尊がさとりを開いて、仏となり、そのさとったところを説いて、法として示されましたので、そこから教えを聞き、教えに従がい教えを広めようとする仏弟子の集い、僧が誕生してきました。

釈尊の弟子は大きく分けて四種類ありました。男性で出家して釈尊と同じ修行生活を営むもの（比丘ビク）、女性で出家したもの（比丘尼ビクニ）、男性の在家信者（優婆塞ウバツク）、女性の在家信者（優婆夷ウバイ）です。

中でも出家の弟子達は、厳しい戒律に従って教団としての秩序を保ちつつ、人の世に安楽をもたらしすべく使命を荷って立つ集いとしての結束をもっていましたので、サンガ（和合の集い）と呼ばれました。サンガという呼び名には、当時の四つの身分階級（バラモン・クシャトリア・バイシヤ・スードラ）の四姓の違いをこえて、平等の人間としての自覚と連帯の精神がこめられています。もちろん、出家者の衣食を提供し、その教えを信奉して僧を支えた無数の在家信者がなければ仏法が広く人の世に浸透することはなかったわけです。

最初に弟子となったのは、釈尊が故國を捨てて修行の旅に出た際に、護衛の任を受けて一緒に出家した五人の修行者達でした。その後で、拜火教徒であった三迦葉と呼ばれる三兄弟が、今までの宗教を捨てて、合わせて千人の弟子とともに釈尊の教えに帰依しました。さらには、有名な舍利弗、目連の二人が、やはりそれまで信奉してきた宗教を捨て、合わせて二百五十人の弟子をひきまつれて仏教徒となりました。釈尊の弟子のうちで、男性の出家の弟子といえは主

にこれらの人々でした。阿弥陀經に千二百五十人と出てくるのはそれをいうのだと言われています。

在家の信者で有名なのは、当時のインドで最大のマガダ国王頻婆沙羅王とその后摩提希夫人、その子阿闍世王、これとならぶ強國であったコーサラ国王波斯匿王とその后末利夫人、その王女勝鬘夫人、祇園精舎を寄進した給孤獨長者こと阿難寶低などです。

また女性の出家である比丘尼の僧伽ができた発端となったのは、釈尊の養母摩訶波闍波提と、釈尊のかつての妻耶輸多羅が出家して仏弟子となることを切望したからでした。女性の出家者による独立した教団は、仏教独自のもので他に例がないといわれています。女は男に隷屬するものでしかなかった男尊女卑の激しい当時のインドにおいて、多くの女性達にとって目のさめるようなことであり、その存在自体が大きな光明であったに違いありません。

釈尊の人格の尊高さとその教えの眞実性は弟子達によって受けとめられ実践され、社会の中で具体化され、伝えられ続けて今日にまで至りました。

あらゆる仏弟子達の動きの全体が、いわば仏法の内容を明かすもの、如来のはたらきの姿であるといえるかもしれません。

仏法が生きているということは、仏弟子が生まれ、育てられ、仏法を光として世に掲げる活動をしているということだといえます。

私自身にとっては、仏弟子となさしめられ、仏法に育て導かれ、仏法を他の人々に伝えていくことです。

仏弟子を仏弟子たらしめる根本は「帰依三宝」ということです。仏とその説きたもう法と、それに集う僧に帰依することが仏弟子となることです。

私達浄土眞宗門徒でいえば、釈尊となって世に現れて下さった久遠の阿弥陀如来と、浄土三部經に示された念仏の法と、その念仏を伝持し、浄土に生れることを願う同朋の集いである宗門とに帰依して浄土眞宗の門徒となるのです。

本山で行われる得度や帰敬式（おかみそり）は、いずれも三宝に帰依して仏弟子となる儀式です。

そして仏弟子となったしるしとして釈〇〇という法名を頂きますが、釈の字

は釈尊の一族となったことを表します。

もちろん儀式を受けただけではほんとうの仏弟子とはいえません。自らが三宝に帰依するというところが、決断がなければなりません。

中国の善導大師は、仏のすすめて下さること（念仏）を行じ、すてよといわれるもの（まつり、いのり、うらない、まじない）を捨て、去れよといわれる所（迷いの世界）を去ること、仏の教えに従い、仏の意思に従い、仏の願われるとおりにすることが、真の仏弟子、となることであると教えられました。

親鸞聖人はこれを受けて、仏弟子に真・仮・偽の三種類であると示されました。偽の仏弟子というのは、姿や形は仏教徒でありながら、内心は、天地の神をあげめ祭り、この世の幸運を祈り、うらないやまじないをこととする異教徒であって、仏の教えを聞こうというところも従おうという気もない人々のことです。ただ神の一種として仏を見て、神仏と混同したり並べたりして祭りあげ、己れの要望を聞いてもらおうというばかりで、仏の、弟子、などではない人々といえましょう。

帰依とはまつること、あがめること、祈ることではなく、聞き従がうことなのです。偽の仏弟子の奥にあるのは、自分のことは自分が一番よく知っている、如来さまよりよく知っているという思い上がりであり、自分の迷いや苦しみを悩みが自分自身のおろかさや、欲望、我意から出ていることに気付かぬエゴイズムなので、他人事とは言えません。私自身の中にいつでも偽の仏弟子になり下ろうとする根性がひそんでいて、教えて下さったのでしょ。

仮の仏弟子というのは、仏の教えを聞き、それに従って一所懸命修行に励んではいるけれども、未だ悪世の凡夫でしかないという己れの身の程を知らないために、いかなるものも南無阿彌陀仏で救おうと、念仏申せ、と呼びかけて下さった如来の真実を光と仰ぐことができず、自分には高度すぎて分不相応な教えや修行にこだわって、結局、あぶらは取らずに終ってしまう人々のことです。

いくら学問を積んでも、いくら経験を重ねても、どれ程仏法を聞いても、どんな修行をしても、腹は立つし、欲は際限なく起り、自分のところが自分で

仕末できないもの。わかった、わかっていいながら、知っているといいながら、俺は、私がいいながら、いざとなったら暗やみの中で迷いもたえるおろかも。知ってみても、やってみても、わかってみても、やはり煩惱でしか生きていない私には、どんなにいい教えも、修行も間に合わない、見抜いて与えられた道は南無阿彌陀仏より他になかったということですよ。

念仏によるより他に、この私が真の仏弟子となりうる道はないと教えて下さったのです。真の仏弟子というのは、私の身も心も見抜き通して、「わが名を称えよ」「われを光とせよ」「われを寿とせよ」「浄土に迎え入れて仏に生れかわらせるぞ」「安心せよ」と名のり出で、呼びかけ続けて下さっている阿彌陀如来の真実が生み出されるものです。

必ず浄土に生れて仏と生れかわり、釈尊の如く、迷いの衆生を導く身になるに間違いない者であるからこそ、真の仏弟子、というのだと親鸞聖人は仰せられました。

仏法僧の三宝は、私自身の、帰依の内容として、見いだされるもの、であり、帰依処として見いだされるべく働きかけ続けて下っていたものであります。仏弟子となることは南無阿彌陀仏が私自身の思いや心をこえて、私の光でありいのちであると、如来の真実があらわれて下さることです。私自身とは別に仏法僧があるではありません。私の帰依を生み出し、はぐくみ、他にまで及ぼすものとして三宝は人の世に現れて下さったのでした。

（高岡市内島・教願寺副住職）



の、人間どうし敬い合い助け合って生きていかねばならないことを知らされます。人間だけでなく動物も植物もそれぞれ助け合い支え合ってこそ命が成り立つことを知らされます。

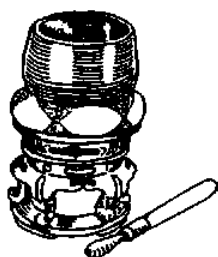
親鸞聖人は、往生浄土の道であると教えて下さいましたが、この人生、大切な責任をもったこの人生、お念仏のところで心の通う世の中を築いてまいりたいと思います。

昔から伝えられてまいりました風俗習慣は、特に教えられることがなくても見様見真似で身につくことも沢山ございますけれども、親鸞聖人のおこころ、阿弥陀様のおこころは、私達の常識では当てはまらないことが沢山ございます。悪人が救われるという言葉一つをとっても倫理に返すのではないかと批判されることもしばしばございます。そうした事、常識ではとらえられない真実のおこころを思います時、どうしても聴聞、仏法を聞かせていただくということを忘れてはならないと思います。

ご任職の話によりますと、さまざまの聞法の為の集いが用意されてあるとのごことでございました。それぞれのご縁を大切にしてくださいまして、このみ教えを多くの方と分かち合っていたきたいと思えます。

本日組巡教にあたりまして、皆様のお寺にお参りさせていただきますました。ご多用のところあたたく迎えて下さいまして、本当にありがとうございます。これをご縁に共にお念仏の道が歩めますよう願っております。

合 掌



本願寺第二十四代即如門主大谷光真様は、一九八〇年法灯を継承され、以後全国の組を巡教されております。組ぐみといえますのは本願寺派の行政区分です。全国の寺院を五三二の組にわけけてあります。当西照寺は、新湊組に所属をしております。

その新湊組へ、さる六月二十三、二十四日の両日にわたりましてご巡教され、各種行事がとりおこなわれました。そのご縁で二十四日西照寺にご巡回されたのであります。

その折に、ご門主様よりおことばを賜りましたので、ここに有縁の皆様におとどけいたします。

西照寺の歴史を通して、ご門主様がお立ち寄られるのは、はじめてのことではなからうかと思えます。このまたとないご勝縁を機に共々に、御法義相統の歩みを深めればと思えます。

尚、この文章は、テープに録音されたものを活字になおしたものであり、文責は西照寺にあります。

西照寺行事案内

夏季（祠堂）永代経

八月八日 逮夜

（午後二時）から

十日 日中

（午前九時）まで

布教使

花 木 肇 正 師

一泊研修会

八月十八・十九日

対象 小学生

お誘い合わせの上、
ご参詣下さいませ。